



昭和45年1月1日発行
 発行所
 名古屋市中区政門前町5/2
 井上重兵衛方 電話(321)1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電話(481)7445

狂言人語

あけましておめでとうございます。
 輝かしい六〇年代の人類の足跡を、未
 来につなげるための飛躍の年、一九七
 〇年代の啓明けです。沖繩の返還を控
 え、安保問題など重要な政治課題の山

謹賀新年 狂言共同社

昭和四十五年元旦

積する中に、新内閣も発足、そして科
 学と文化の総力を結集した万国博も、
 華々しく開催されます。私達の抱負も
 大きく拡がり続けます。新しい年、今
 年もよろしく願っています。

一月の催能

一月三日 支部開初 午後二時
 一月七日 第十四回 学生能と狂言の会
 能経 政 山田 信幸 高安 滋郎
 能小 督 福島さち子 境田 里美
 前川 幸子

狂 佐渡狐 大竹 裕一 森 健次郎
 一月十五日 清韻会 (来聴歓迎)
 能 養 老 殿島 修二 西村 欽也
 能 鶴 亀 福岡 昌作 高安 滋郎
 狂 種ノ酒 井上松次郎 井上礼之助
 佐藤卯三郎

一月十八日 宝生会定式能 (有料)
 能 春日龍神 内藤 泰二 西村 欽也
 能 楊貴妃 大野 弘之
 能 筑紫奥 宝生 九郎 高安 滋郎
 一月廿五日 三人を観る会
 能 清 経 泉 嘉夫 西村 欽也
 能 舟弁慶 和島富太郎 高安 滋郎
 狂 三人片輪 野村又三郎
 井上礼之助
 井上松次郎

狂言解説

佐渡狐二年貢を納めに都へ上る佐渡
 と越後のお百姓、道中、佐渡に狐が居
 るか居ぬかの口論から賭縁になりました
 た。所が佐渡の百姓は判定を頼むお奏
 者に袖の下を贈り、狐の様子を教えら
 れて対決に臨みましたが……
 百姓狂言の内では劇的対立、風刺のき
 いた面白いものです。

樋の酒留守になると盗み酒をする
 例の冠者達、今日は二人を別々に酒蔵
 米倉に閉じ込めて主は外出しました。
 離れ／＼の二人は一計を案じ、長い竹
 筒を二つの倉にわたして酒盛りを始め
 ます。

筑紫の奥例のお百姓、丹波のお百
 姓と筑紫の国の百姓とが上り合せ、め
 でたくめい／＼の貢物を納めて帰って
 行くという百性狂言の典型と云えまし
 よう。

三人片輪ある有徳人が片輪者を抱
 えるに聞いた食いつめ者三人、にせ片
 輪となつてまんまと抱えられました。
 やがて主人の留守に、三人は賑やかに
 酒盛を始めます。

狂言内外

野村 広二

新年おめでとうございます。四十五
 年の能界が、にぎやかな古典の幕を開
 くよう、はじめにみなさまとお祈りし
 たいと思います。

四十四年もなかなか話題の多い年で
 した。四十三年につづいて長老の叙勲
 記念能、祝賀および追善能、老女物の
 公演、海外能、芸術祭受賞決定という

明るい記録に、能関係者他界の消息な
 ど。まづ、茂山千作翁はじめ叙勲の方
 々には、永年のご努力顕彰に対し、あ
 らためて賀詞を呈したい。次に、昨年
 の芸術祭能は、「観阿弥・世阿弥・元
 雅」をテーマに東西の諸家が参加して
 華々しくその研を競いました。狂言も
 和泉流では野村万作氏が「月見座頭」
 の試演を紹介。大藏流は始祖玄恵法印
 生誕七百年記念狂言会を東京・京都・
 大阪・奈良ほかで開催、多数の同好者
 を集め、大層有意義な催しとして、狂
 言と能の世界に目立つ寄与をなしてい
 ました。わたくしはその京都・大阪の
 二か所を拝見した。「入間川」や「石
 神」などなつかしい曲に、「釣狐」を
 家元大藏弥太郎氏は「白式」でつとめ
 た。まことに老狐の感深く、柔和な
 かに重厚なムードを一杯盛り込んだ前
 と後の演技は、心動かす何物かがいま
 でも残っております。特に白藏主の姿
 からは、奥深い明暗の両界をのぞくこ
 とができるようでした。千作氏が「石
 神」で、懸命な山本則寿青年をかばつ
 てしかも火花を散らすようなわざをみ
 せるあたり、まことにゆかしいものが
 ありました。「入間川」の善竹忠一郎
 の大名姿の似つかわしさ。玄三郎・幸
 四郎・圭五郎三氏それぞれに自分の持
 役でみせる手練は、これまた大木の大
 枝に三者各自のはなやかで地味な色の
 花を供えているようにみえました。そ
 れにも負けず、大蔵の次の世代を背負
 つていく若い人たちが何と元気に舞台
 をふむことか。一見、狂言の世界に何
 の疑問も持たず、自分の世界を信じて
 さらりと登場する若木の姿をみたとき

一種の安らいだ心がはげしく、かつしづかに起伏しました。そのうちにも大蔵基嗣君の実に素直な成長ぶりには感歎の外はない。東に基嗣、西に正義とやがては相提携して、東西に大蔵の狂言を発展させる大きな星となるでしょう。一転、和泉流もこういつた盛儀を興行することができようかと、別の考えが流れました。次の瞬間にはこの問いを追いかけるように、大狂言会が、一堂に会して、できることはもちろん当然のことと思えました。万蔵・藤九郎両氏以下名古屋勢まで、平素貯えてきた地力が、ぱつと開花する世紀の大きな催しがとの夢想も一瞬去来しました。狂言の進む路に安心めいた明るさが拡つていつたのはその直後でした。親しい人とて、北岸佑吉、沼岬雨、中村保雄諸氏におあいしたが、元氣な笑顔をみせていただくだけで、休憩の短かい時間に、一・二の話題の交換がせいぜいでありました。それでも相会うことは何とも楽しいことです。野村万蔵氏は、十一月の名古屋和泉会に來名、その垢抜けした、微妙な「布施無経」の舞台に一堂を感歎させました。布施無経と縄ないの二曲は、そのくどさと片やむごさのあることで余り好きではないのですが、万蔵流の芸の展開は、ごくすなおに布施無経の曲趣を呑みこませてくれた。かみしめることができました。あるいは京都あたりでみているのであろうが、その記録にさかのぼるのは止めて「万蔵の芸」にあらためて贅辞をおくりたい。その不動のなかの軽妙しやだつ、人間の心底にある不思議なものを、のぞかせて

尽きる所を知りません。藤九郎氏の舞台には接しなかつたが、アポロ十一号の月着陸を記念する狂言小謡新作で、健在ぶりを示してもらえた。曰く「月に立つ／人はよるこび浮き／と／両足揃え、うさぎ飛び／尻餅ついて月面に減入り込もうでは一大事云々」でありりとした佳さをますます光りかがやかせて、まるで古風な西陣の織物に、思わぬモダンな色あいをみつけた喜びを味わうことができます。各氏ともどうか健康に留意されますように。

次は、昨年は薪能(野外能)が方々でおこなわれ、これを楽しむ人たちがあふれました。東海地方では、名古屋のほか、鈴鹿市でも盛會に催されました。鈴鹿市といえば、おなじ三重県の名張市には、観阿弥顕彰記念碑が建ちましたこともあわせお伝えしたい。また伊勢神宮文化殿の新築。その舞台披露の能・狂言は、喜多実の「翁」、大蔵弥太郎の「三番三」で無事奉納を果しました。和泉流は「素袍落」(保之・松・礼)を勤めたことを書き添えたい。東海のことには少しくふれましたが、次の老女物では、「松垣」に山本博之、「鸚鵡小町」に後藤得三、金剛巖ほかの諸氏が名を連ねました。今年の海外能(パリほか)は千五郎、山本則寿・則俊兄弟の三氏が参加。それに金春流では、「木賊」(桜馬道雄)の復曲公演がありました。また能の演ぜられる場所—舞台が、この年後半に論議されるようになり、まだこの後も続いて論ぜられる由。待望する次第です。京々観世會館案内「能」の十二月

号で近代能楽百年史(4)もいよいよ昭和二十・二十一年を迎え、現代の波瀾多い時代に入りました。国立劇場の舞楽「探桑老」と薬師寺・長谷寺の声明紹介も必見の一事でした(参考、朝日ジャーナル12・14、宮坂宥勝記)。演能では、広瀬賞受賞記念、舞い納めの「道成寺」を「古式」で舞った豊嶋弥左門氏のワキを、高安滋郎氏が勤めました。年末高安氏と久方ぶりに近況を語り合いましたときにもでた話ですが、東京の先輩工氏の能評が大層印象にのこるのでと披露しました。それは、東西の芸風の相異の違和感です。芸風が東と西とはちがうのに、も一つ名古屋の技芸もみられないところでは異様であらうかと。種々の反省がかくされていようです。わからないことも突然心のなかで光り輝くことがあるだろう。高度におもしろく、楽しく狂言や能をみて信頼をよせるには、心が通いあわねばならぬのではないかと。別るとき、藤田六郎兵衛氏と話しました。両氏の聞書は他日にゆづりたいとおもいます。感銘をうけた本の一端をあげますと、「かくれ里」(白洲正子)「花の心と能の心」(中村保雄)「軍記」(名大・山下宏明、注・世阿弥のみきぎした平家物語)「対談」(谷川徹三・湯川秀樹)「世阿弥・口語訳花伝書」(観世寿夫)「観阿弥と世阿弥」(戸井田道三)「歌舞伎の国際的評価」(服部幸雄)「世阿弥は小男」(森末義彰)「驚流始末記」(藤浦富太郎)などです。鬼籍に入られた方々は佐野安彦・吉見嘉樹・荒木良雄の三氏に加えて年末亀井俊雄氏の名を入れねばならぬ

賀正

河文

電話代表四一三八一

トヨダビル店

大名古屋ビル店

とてな

船津屋

電話番名代表②一八八〇番

寂しいたよりをお目にかけることになり
ました。ご冥福を祈りたい。

さて、名古屋のことですが、四十四
年の演能も矢継ぎ早のいそがしきで大
層にぎやかでした。狂言は第十一回を
迎えた朝日狂言会、第九回を演じた名
古屋和泉会に、やるまい会の三つほど
れも盛況であったのは何よりも楽しい
ことです。五十番を越す狂言のうち、

一昨年同様十五番ほどしかみていませ
んが、それらは「布施無経」(万蔵)
「素袍落」(干作)「水掛舞」(千五郎)
「膏菓煉」(千之丞)「井杭」(万之丞)
「耕介」(首引)「万作」(猿座頭)「泣
尼」(墨塗)「保之」などの東西大蔵
・和泉二流の演者の舞台に、一宗論
「餅酒」(松・礼・卯)「狐塚」(卯・
礼・弘)「弥宜山伏」(丘造・卯・
礼・又・後見松)「止動方角」(卯・
松・弘・友)「牛盗人」(豊弘少年は
か)があります。河村丘造老はいよいよ
よ枯淡の芸境です。小舞「大原木」は
印象に残る一番です。能はみるべき三
十番のうち、十番ほどしか拝見してお
りません。「望月」(鏡之丞)「清経」
(祐)「六郎」(実盛)「猶義」(通小
町)「橋岡久馬」(武雄)「老松」(元
昭)に「阿古木」(金剛巖)などで、
「半藤」(喜之)「通小町」(英雄)「山
姥」(金春信高)「頼政」(友枝喜久夫)
をみ損ねたのは残念でなりません。名
古屋勢では、「枕慈童」(内藤泰二)
「羽衣」(長田驥)が印象にのこりま
す。大衆能、新能(市民能)、学生能と
狂言の会、高校生鑑賞能(金春)が行
われたことはいまでもありません。

歳末財ひ合い義援金募集能もありまし
た。いろいろの活動がおこなわれてい
ることは申すまでもありません。各新
聞社の謡曲・狂言教室も活潑ときいて
おります。なお役者では留の藤田昭彦
君の進歩いちじるしく、活目に価する
ものがあります。一にも修練、二にも
修練であることは申すまでもないこと
でしょう。

年末の放送では、「鉄輪」(松本謙
三ほか)「野守」(元昭)「舟弁慶」(寿
夫、いづれもNHK)など。本では「
奈良の年中行事」(保育社カラーブツ
クス)「清経入水」(第五回太宰
治賞受賞、秦恒平、展望八月号)「平
清経」(権藤芳一、淡交十二月号)「風
雅な人形供養」(北鎌倉松氏邸、芸術
新潮十一月号)「おしやれ紳士録」小
森松菴」(村島健一、芸術生活十二月
号)「英文花伝書」(里井陸郎ほか、京
都住谷・篠部出版会)「朝日狂言会の
十年の歩み」(名古屋・竹尾邦太郎、
寄贈能・狂言創刊号)など。昨年も内
藤泰二氏より奈良県天川弁才天社、岐
阜県神所春日神社、おなじく能郷白山
神社の能・狂言面の写真資料を多数寄
贈していただいたことを謝したい。

今年の名古屋能界には、能・狂言の
啓蒙運動に尽力されますようお願いし
たいとおもいます。私心なく、巧妙心
なく、ひたすら活躍されるようお願い
したい。狂言や能が、内外多くの人た
ちにみてもらえるよう祈つてやみませ
ん。

犬追物 (いぬおもうもの)

西村 弘 敬

本年の干支(えと)は戌でありまし
て普通には犬の文字を用いて居る。謡
曲や狂言には此犬という文字は随分多
く出て来ます。其中に殺生石の謡に犬
追物(いぬおもうもの)といふのがあり
ます。此犬追物といふのは鎌倉時代に
流行した騎射の遊びで、馬に跨つた騎
馬武者三十五人が犬を百五十四取り囲
み其周囲で馬を走らせながら藁目(ひ
きめ)の矢を以て犬を射るといふ遊び
であつて、後には流鏑馬(やぶさめ)

と云つて四角の三個を並べ置きて之
を一人にて三個を射るといふので、多
く神社の祭礼などに余興的に行はれた
ものの様で前の犬追物の変化したもの
かと思はれる。此犬追物は殺生石の謡
の中にある如く、最初は玉藻前(たま
ものまへ)の執心が狐であるので狐、
即ち野干を退治するので「野干は犬に
似たれば犬にて稽古あるべし」と、百
日犬をぞ射たりける是犬追物の初めと
かや」とある。此
是犬追物の初めとかや」の謡い方や
柏子当りが流儀によつて色々になつて
居る、即ち左の通り

昔の当り方

3	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
4	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
5	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
6	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
7	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
8	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
1	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
2	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
3	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
4	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
5	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
6	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
7	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ
8	いぬをぞ	い	たりけ	る	これいぬ	お	ものはじめ	とかアヤ

犬の狂言

金剛流 いぬをぞ いたりける
宝生流 いぬをぞ いたりける
金剛流 いぬをぞ いたりける
全春 は大體観世に全じ

当年は戌年、これにちなんで犬に関
する狂言を見てみよう。実際に犬が舞
台上に登場するのは大山伏。茶屋に同席
した山伏と僧、威張ちらす山伏と僧と
が法力競べをすることになり、共に茶
屋の猛犬を手馴つけんとするが、どう
感ばかりちらした山伏は結局犬に追い込

まれる。勿論これには裏があり、僧の
お経に例の「南無からたむのうとらや
」の文句がありこのとらが犬の名
で、この犬、名前さえ呼ばれれば尾を
振ることを茶屋に教えられているので
ある。

この他、「釣狐」では前シテ白蔵主
に化けた狐が犬の遠吠えに驚いたり、
盗みに入つて見つかり、犬の真似をさ



昭和45年2月1日発行
 発行所
 名古屋市中区西門前町5/2
 井上重兵衛方 電話(321)1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電話(481)7445

狂言人語

寒さもまだく／＼これからです。それでも二月となると梅便りもちらほら、そして春を呼ぶ東大寺二月堂のお水取り、厳しい寒さの中に春を待ちわびるこの頃です。

梅一輪、一輪ほどの暖かさ
 とところで春と云えば、いよ／＼万国博も三月に幕をあげます。世界の文化芸術の祭典には能楽も参加、日本文化の伝統を世界に紹介します。皆様と共に成功を祈りましょう。
 今月は観世会定式能を中心に観世流の会が目白押し、観世フアンの方にはうれしい月です。どうか皆様お出かけ下さい。

二月の催能

- 二月一日 邦誦会 午前十時卅分(有料)
- 能通小町 鷺尾 周三 谷田宗三朗
- 能班 女 梅田 邦久 西村 欽也
- 能山 姥 片山慶次郎 高安 弘之
- 能 片山慶次郎 高安 滋郎
- 能 佐藤卯三郎
- 能 井上礼之助
- 能 佐藤 友彦
- 能 栗田口 野村又三郎

二月 八日 観世会 午前十一時始(有料)

- 能 鉢 木 観世 元正 高安 滋郎
- 能 東 北 観世 喜之 西村 欽也
- 能 鶴 観世 元昭 高安 滋郎
- 能 友彦

二月十一日 幸友会 雑子会

二月十五日 梅猶会 十一時始(有料)

- 能 班 女 梅若 猶義 高安 滋郎
- 能 文 象 梅若 盛義 西村 欽也
- 能 友彦
- 能 井上礼之助
- 能 大野 弘之

二月廿二日 たなびき会 雑子会

狂言解説

栗田口は道具競べの為に栗田口を求めに都へ上った冠者、まんまとスツパにだまされ、蘆来の鴨の打出の小槌とて何でも打ち出せるといふ古小槌を求めて来ます。さて、主の前で得意になって馬を出さんと小槌をふるのですが……。

栗田口は実は刀のことです。宝の槌はやはり道具競べのため宝を買いに上った冠者、まんまとスツパにだまされ、蘆来の鴨の打出の小槌とて何でも打ち出せるといふ古小槌を求めて来ます。さて、主の前で得意になって馬を出さんと小槌をふるのですが……。

昆布布は年貢を納めに上った丹波と淡路の百姓。銘々の捧物によそへて二人で一首の歌をよみ、名を申し上げよとの仰せには拍子にかゝつて申し上げる。百姓狂言筋立ては大同小異ですがそれ／＼御前での所作に趣向がこらされていきます。

狂言 浅深

野村 広二

一月十八日、今年はじめて熱田さんにかけた。宝生会で、狂言「筑紫の奥」(秀・友・礼、後見松)をみる。構成はともかく、登場する三人の笑いでおわるのがまことに正月にふさわしい。ヒル下りの青い空、お宮の森のわづか上には十日前後の白い月が冷めたかかかつて、池の氷が鈍くはり、目の当る側は水となつてしづまり、当らぬ方は雪が白い、何ともいへぬ冷えた光景をいつまでもみていた。ならずの梅も、上知我麻神社の白い梅も蕾はまだ固い。十三日の歌会始のお題は「花」去年の暮、栄地下街で、白輪子地に紅ほかの大きな梅の模様をみて、それが突に見事、揚幕の五色を連想したがそれと梅の花をかく勅題黒茶碗を求めたのをあらためて思い出す。二日の日には、まづ谷川徹三先生の「棺割り清拙」(人・文化・宗教)のころを開いて読む。「毘嵐空を巻いて／海水立つ／三十三天星斗湿う／地神怒つて把る云々」の遺囑は声をあげてよむ。あの書は実にすばらしい。それから福原麟太郎氏の「三番叟」「謡曲の文学的表現」など(書齋のない家)を。第三には、英文花伝書(里井陸郎ほか共著)の花修篇の一節。「ただしかんのうの人はこのちがいを心得てけうかる(けしかる)故実にて」の前後である。これは、年末年始、M教授におあいしていないまま、十一月に久方ぶりお目にかかった折、「けうがる(法師)」のことについて、研究ノートをうけたまわつたのに、つながつていたせいかも知れぬ。「ウイズ・グレイ・ケア」の英訳である。それから犬年に因む円空カレンダー(後藤英夫)、「茶花・本阿弥椿」の写真(淡交一月)、「ウォルトア・ペイターと能」(福原麟太郎)にうつつて、次第に乱調になつていった。正月の放送は、今年の「翁」は金春流である。狂言はテレビ「餅酒」(万蔵ほか)、ラジオ「筑紫の奥」(善竹忠一郎ほか、いづれもNHK)など本は「能と金春」(名古屋・広瀬瑞弘初音書房、寄贈)「日本人の美」(谷川徹三・東山魁夷、北日本新聞一・二)「いまものこる驚流狂言」(山口県下期日一・九)「能楽」(M・L・パーギッシン、北国新聞一・三)「ギリシヤ神話」(呉茂一・佐伯彰一、波一・二月合併号)など。

「栗田口」雑感

二月に「栗田口」「宝の槌」(いづれも野村又三郎氏)と共に目出たい狂言が観られる。前者は大名シテ、後者は太郎冠者がシテであるが、ともに「末広」の系統に属するものである。

「栗田口」は「大果報者」の名乗りから冠者が都へ上りままとスツバにだまされるまでは全く「末広」等脇狂言と同じである。所が「末広」の果報者は見識高く、末広の何であるかを知っている。時々下人達の知恵を試さんと難問を出し(三本柱)、外見どおり威風堂々たる大名である。ところが「栗田口」では大名は何もしらない。抜かれた冠者を「出来した」とほめ上げ、「南無三宝、しないたり」となる。これが「栗田口」を大名狂言とし(大名狂言はすべて大名がどこか抜けている)脇狂言と区別される故にである。

この「栗田口」は京都東山、三条白川橋の東から東山の山際までの地名、鎌倉時代以後刀鍛冶が多く居住したと云う。彼らはその在名から栗田口氏を名乗ったもので、後鳥羽院の番鍛冶であった栗田口藤林左衛門尉国友、その子藤馬丞則國の名が見える。

この栗田口氏の打った刀を道具鏡で競うわけだが「紙に包んでも万疋はする物じやと云程に必らずぬかれな(大蔵虎寛本)という言葉がある。つまり紙に包んであるだけの最低の安物でも万疋、まして箱書きのある物は、数万、それ以上も、という意味である。ところが和泉流では「紙に包む程

なものなれども高値な物じや(天理本、和泉古本以後この言葉削除)とあって、これだと栗田口は箱書きがつく程の値打の物ではなく、せいぜい紙に包むだけの代物だが、ということになる。ちなみに諸本の品物の値段を比較してみよう。

(虎寛本)

栗田口 万疋

末広 五百疋

目近・籠骨、共に五百疋

宝の槌 万疋

隠笠 (宝笠) 万疋

鏡 万疋

となり栗田口は宝の類と同額である。

(天理本)

栗田口 万疋

末広 五百疋

目近・籠骨 (常に同じ五百疋)

張蛸 () 万疋

宝槌 二万疋

宝笠 (宝槌に同一万疋)

であって虎寛本と同額ではあるが、宝物類よりは安い。

これが後世になると

(雲形本)

栗田口 万疋

末広 五百疋

目近・籠骨共に五百疋

張蛸 千疋

鏡腹巻 万疋 (千疋共)

宝の槌 万疋

宝笠 二万疋

とかなりバラエティに富んでくる。いずれ適当に値をつけたものであろう。真实性は乏しいには違いない。栗田口の場合、一騎が萬騎にも匹する男を買

うのであるから高値には違いないが、同じ人身売買でも、「磁石」の場合には諸本ともいずれも田舎者は「二百疋」の鳥目で売りとばされている。文字通り栗田口は万疋しても不思議はないと云えるだろう。

三月の予告

三月一日 九皇会(来聴歓迎)

能天 鼓吉田 妙 西村 欽也

間 佐藤卯三郎

能羽衣 鈴木 胡蝶 高安 滋郎

能胸突 井上礼之助 井上松次郎

三月八日 青陽会(有料)

能金輪 高橋 暁一 高安 勝久

間 佐藤 友彦

能頼政 河村 鉦二 西村 欽也

間 井上礼之助

能熊野 浦田 保利 高安 滋郎

能野守 柴田 収武 高安 滋郎

間 佐藤 秀雄

能鈍太郎 佐藤卯三郎 井上松次郎

三月廿一日 能楽友ノ会

能小袖曾我 泉 嘉夫 修二

間 大野 弘之

能道成寺 梅田 邦久 高安 滋郎

間 井上松次郎 佐藤 秀雄

能鏡 野村又三郎 井上礼之助

三月廿九日 中日五流能

重要無形文化財

第15回記念中日五流能

昭和四十五年三月二十九日(日)

名古屋・中日劇場

第一 第一部 (午前十時開演)

金春 泉 治郎

雨 月 高安 滋郎

彩色 谷口喜代三 前川 善雄

曾和 博朗 森田 光春

井上 祐一 茂山 千之丞

止 栗 太鼓 喜多長世 熊坂 金春信高

梅若六郎 杉浦元三郎 野村四郎

観世 元正 山本敬一郎 藤田大五郎

大原御幸 宝生 弥一 幸 宣恒

庵室留 佐藤卯三郎

一、笠之段、大坪十喜雄、田鍋惣太郎。

仕舞、田村、柴田初太郎。西行楼、杉浦友雪。

玉之段、梅若猶義、野守、梅若乃紀夫。

後藤 得三

小鍛治 江崎金治郎 鶴岡六之左 小寺 金七

白頭 鶴岡六之左 藤田六郎兵衛

第二 第二部 (午後三時半開演)

加藤 文太郎 梅若 猶彦

柴田 収武 藤井 徳三

大西 智久 梅田 邦久

梅若万三郎 殿島 修二

安 宅 宝生 弥一 山本敬一郎 藤田六郎兵衛

勸進帳・酌掛之伝 三宅藤九郎 野村又三郎

別習一、船弁慶、梅若六郎、柿本豊次。

仕舞、鶴之段、岡久雄、隅田川、山階信弘。

天鼓、片山博太郎、歌古、金剛巖。

狂 子 盗人 三宅藤九郎、和泉 保之

宝生 九郎 井上松次郎

羽 衣 江崎金治郎 飯島六之左 柿本 豊次

盤 加茂、辰巳孝、藤戸、野口録久。

仕舞 豊島三千春 種田道雄 奥野達也

絃 上 高安 滋郎 曾和 博朗 森田 光春

附 祝 言 主権 中日新聞 後援 文化庁

一部入場料、特二、八〇〇円、A二、二〇〇円

B一、八〇〇円、C八〇〇円

前売券扱所、名古屋市内各ブレイカド、能楽師宅、中日新聞各地本支社。



狂言人語

それとわかる「春一番」が吹き荒れたあと、寒暖の激しい不順な日々が続いておりましたが、もう三月、暖かい春を産み出すための苦難にも似たこの時期も、やがて終りを告げようとし、いよいよ「春は私達の手の届く所までやって来ました。」

世紀の祭典「万国博」も開幕を今月半ばに控え、巷の噂にのぼらぬ日とてありません。世界中から折りすぐられた芸術文化に互して我が「能・狂言」を汎く世界に紹介するため、参加公演の成功を祈りたいものです。

さて、今月の当地の催能はいずれも豪華な番組で予定されており、中京能界の愛好者にと発刊された「能楽の友」が早や三年、内容もいよ／＼充実して参りましたが、この三周年を記念した記念能が、梅田邦久師の「道成寺」を中心に盛大に催され、そして三月二十九日には、これも十五回を迎える「中日五流能」が記念能として五流の名手を東西より招いて、華々しく開催されます。愛好者には嬉しい便り、是非ともお見逃しのなきよう、御鑑賞下さい。

三月の催能

Table listing dates (e.g., 三月一日, 三月八日, 三月廿一日) and names of performers and plays (e.g., 九臯会, 青陽会, 能楽友ノ会).

昭和45年3月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5/2
井上重兵衛方 電(321)1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(481)7445

狂言解説

胸突||借りた金をなか／＼返済しない男、今日こそは返済させんものとして来た借金取りと口論の拳句、はずみで胸を突き倒されました。座り込んだ男は、さあ、あばらが折れたの、死ぬのとわめき散らし、逆に相手を脅迫する始末。まんまと借状を取り上げてしまします。

Table listing names of performers and plays (e.g., 栗山千作, 梅若万三郎, 三宅藤九郎).

立てた次郎冠者は寝ている太郎冠者の顔に鬼の面をかぶせておきました。戻った主はびっくり仰天……。
栗焼||丹波の伯父から贈られた見事な栗を焼くように仰付けられた冠者、焼く内に、あまり美味そうなのにつられて一つ口に入れたが最後、とても口の離さるゝものではなく、遂に皆食べべてしまいました。さあ、云いわけには何と……。
子盗人||或る家へまんまと忍び入った盗人、ふと部屋の中で赤児を見つけた。泣かれては困ると抱き上げたのですが、その児の可愛いこと。遂に盗人である我身の立場をも忘れ、夢中であやしている所を家人に見つかってしまします……。

狂言浅深

野村 広二

一月末より二月の狂言は「三人片輪」(又・卯・礼・松)と「栗田口」(又・礼・卯)をみる。やわらかさの目立ってきた又三郎の芸はもう少しそのねばりが抜けたらとおもいます。そして、前者の景清の小舞も際立ち、後者の途中の運びもすっきりしたのでしよう。今年の観世会、梅猶会初会は行けなかったが、文字通り若さのみなきる京都若手能で「山姥・白頭」(片山慶次郎)と、和島富太郎・泉嘉夫・野村又三郎の会で「舟弁慶・真之伝、波間之拍子、早装束」(和島富太郎、間・又三郎)をみる。堅実豪壮でした。そ

れに、「鉢木」をみたりきいたりした月で、近藤乾三氏の「鉢木」がカラーで二度もみられたのは、まづ出がすばらしかった「鉄輪」(金剛巖・解説沼艸雨)をみたのとあわせて、仕合わせな月でした。その同じ日に、善竹忠一郎氏の「悪太郎」をきき、「鬼の継子」をみたのも楽しかった。あの乾三の芸はまさに蘭位の境地といえよう。それから数日たって、着物の尻ばしよりをして庭の手入れをしながら、一休、能をみて幽玄、狂言をみて笑いを味わうのですが、この頃の演劇論の文章では幽玄と笑いそのもの以外のところでは書かれている。国内でも外国でも、そこが、魅力であり、関心をとらえさせ新境地でもあり、能芸論の広さでもありましよう。それはそれで十分の成果ですが、能や狂言をみるときはやはり幽玄や笑いを求めるのではないかと、老女物やあの鉢木のことを思い出して考えこみました。催し物では故坂本繁二郎追悼絵画展(朝日)を三回みにかかけ、百点余りのうちたしか十三点あった能面だけの画を丁寧にみせてもらいました。傑作です。放送では「安宅」(桜間道雄、佳編、以上いづれもNHK)。本では「民間の仮面」(後藤淑、木耳社、未見)「坂本繁二郎の芸術」(谷川徹三、朝日二・一四)「見直される日本の伝統」(河地前特派員朝日二・一七—一九、三回)など。

三月は「能楽の友」発行三周年記念能がおこなわれ、中日五流能にわが狂言共同社のメンバーがこぞって出演する。発行してこの三月で第三十九号を迎える同誌の発展と共同社のおおらか

な活躍を祈って止みません。

義捐能余聞

旧冬十二月十三日開催されました。義捐能の益金を県及市に寄託致しました。処其後県及市よりの感謝状ならびに各養護施設。老人ホーム。或は個人から思ひがけない多数の礼状が支部長宛に届いております。

その全部を報告する事は紙面の都合上困難ですが、養護施設にいる児童の礼状を一部左記に披露致します。

原文のまゝ

能楽協会名古屋支部のおじさんへ、能楽協会名古屋支部のおじさん、お元気ですか、私達毎日元気にくらしています。お正月の、おこづかいをいただき、どうもありがとうございます。私達毎朝六時に起きて、そうじをしています。冬はとても寒いですが、ちゃんと、六時に起きて、がんばっています。またひまなど、あったら遊びに来てください。

さようなら
志賀美恵子より

能楽協会名古屋支部のおじさんへお正月のおこずかいどうもたくさんくれてありがとうございます。多くのお金があったので、いろいろなものを買えました。いろいろなものを買って、まだあまりましたのであずけました。いま卓球の練習をやっています。いつかわかりませんが卓球の試合があります。ぼくはいしようにけんめいにやります。

思います。でわからだにきをつけて。さようなら。
日恵野哲郎
愛知県豊川市の養護施設光輝寮のみなさんです。

四月の予告

- 四月 五日 竜吟会囃子会
- 四月 十二日 観世会
- 能 蟬 丸 大脇寿美子 高安 滋郎
- 前野 隋子
- 井上松次郎
- 狂 泉山伏 佐藤 友彦 井上礼之助 佐藤 秀雄
- 四月 十八日 猶 謡 会
- 能 天 鼓 杉田 合子 高安 滋郎
- 井上松次郎
- 四月 十九日 観世会定式能
- 能 清 経 梅若 猶義
- 能 千 手 観世鉄之丞
- 能 安達原 大槻 秀夫
- 井上松次郎
- 狂 竹の子 井上礼之助 大野 秀雄 佐藤 弘之
- 四月 廿六日 清観会別会
- 能 藤 戸 大槻 秀夫 西村 欽也
- 能 熊 野 佐藤 秀雄
- 能 乱 野 観世 元正 高安 滋郎
- 杉村 竹翠 西村 弘敬
- 狂 骨 皮 野村又三郎 井上松次郎 大野 弘之 井上礼之助 佐藤 卯三郎
- 四月 廿九日 幸友会

酒 味 噌 商
た ま り

食 料 品
む と う 食 品 店

名古屋市昭和区川名本町1の10
電 話 2 1 6 6 番



昭和45年4月1日発行
 発行所
 名古屋市中区奥門前町5/2
 井上重兵衛方 電(321)1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電(481)7445

狂言人語

四月——暖かな日射しがいっぱいになり、折々の風が冷たさを感じさせます。すべての生き物の胎動が手に取る様、桜のつぼみもふくらみを増し、野山の色どりも日毎に新鮮さを加えておられます。

万国博も連日大盛況の由、春にうき立つ私達の肝を冷やしたのが、今度の日航機墜落事件、話題の多い春となりました。事件の無事落着はめでたいものがありますが、尚今後に大きな問題を残しております。ともあれ七〇年決戦を叫ぶ過激派学生の動きが大きく気にかゝることです。

四月の催能

- 四月五日 竜吟会雑子会
- 四月十二日 鶴正会 午前九時始
- 四月十八日 猶観会 (来聴歓迎)
- 四月廿九日 幸友会

四月十九日 観世会定式能

- 能 清 経 梅若 猶義 高安 滋郎
- 能 千 手 観世鉄之丞 高安 滋郎
- 能 安 達 原 大槻 秀夫 西村 欽也
- 能 竹 の 子 井上松次郎 佐藤 秀雄 大野 弘之
- 能 藤 戸 大槻 秀夫 西村 欽也
- 能 熊 野 観世 元正 高安 滋郎
- 能 乱 杉村 竹翠 西村 弘敬
- 能 骨 皮 野村又三郎 井上松次郎 大野 弘之 佐藤 卯三郎

狂言解説

鼻山伏 山から帰った弟が物の気、心配した兄は行力の強い山伏を頼みます。きけば山で鼻の鼻をおろしたと、疑いもない鼻のつきものと、早速山伏は祈りにかゝりました……。謡曲「葵上」のパロディです。

竹の子 隣の竹藪に根を持つ竹の子がひょっこりこちらの畑に顔を出しました。さあ、竹の子の所有権をめぐって、畑主と敷主の間に争いが始まり、実力主義の時代のこと、結局は勝

狂言浅深

彼岸の中日は小雪がちらつく。この日「大会」(喜多長世)と「業平餅」(野村万蔵親子)をみる。近ごろ、私事ながら、老母の大病とわたくしの環境の変化などで身辺多事。その十日の日、M教授が永い間の労をねぎらってくださった。雪舟筆山水図の写をいただく。巻物の見開きのところに、いかお話しした「花修」の「興がる」のくだりがしるされてあった。わづかな時間のもりいでいて、実は長時間を楽しい談笑裡にすごした。そのなかで養生談から「脈論」の能のあることを一書をとって示し給う。またの名を「仲速」(ワキの医師の名)ともいう。その後には「陵王」の曲名も見出す。これには後日談があるが、別の日にゆづりたい。さて、三月は能楽の友社記念能「道成寺」(梅田邦久)が舞われ、中日五流能第十五回記念能では「安宅」(梅若万三郎)がでる。大きな能ではどちらも演ぜられるのだが、仲よくわけあってみられまたみせるところが名古屋のよさである。五流能の当日は急におそい春がやってきてあたたかい

山伏狂言

山伏の登場、腕をぐいと振り堂々と足を高く上げて登場する。次第に続き「出羽の国羽黒山の山伏です」と名告る。狂言でこの「……です」の使用を与えられるのは大名、閻魔、鬼、奏者

負の果てに……。骨皮 隠居せんとした老僧、新発意に寺の管理を任せ、人との応答の仕方を教えたのですが、融通のきかぬ新発意はことごとく取り違え、老僧と新発意の口論の末、ついには坊主の女犯まで新発意はすっぱ抜きます。

野村 広二

それに山伏ぐらいのもので、「——にて候」——「で候」——「でさう」——「です」と転じたこの使い方はいかにも尊大な感を表す効果がある。さらに今一つの登場の仕方は「鼻山伏」「茸」などにおける登場、アドに案内を乞われた山伏が揚幕から堂々と登場し、謡曲「葵上」の物よろしく、幕際で「九識の窓の前、十乗の床のほとりに……」と謡う——「てんでカッコイ、と見ると次の瞬間にはアドの声で腰を抜かす、という具合である。

さて、山伏は祈りの場面でいよいよ本領を発揮する。謡曲「安宅」をもじった前置きを忘れない。

「夫、山伏といつば、山に起伏すによつての山伏なり。何と聞えた事か。」

「頭巾といつば布ぎれ一尺ばかり墨に染、むさとひだを取て、いたゞくによつての頭巾なり」「いらたかの数珠ではなうて、むさとしたる数珠玉をつながあつめ、いらたかの数珠と名付、云々」(雲形本——彌宜山伏)

そして祈りの文句の多くは謡曲からそっくり、または一部をもじって借用している(葵上、安宅、壇風など)さて、この祈りの文句には狂言独特の愉快なものがある。

「いかに恐しい蠻なりとも、ふきの印をむすびかけ、いろはにはへとと祈らば、などかちりぬるをわかなり、ほろおん」(雲形本——蟹山伏)

「いかにあちらこちらへ移る鼻成りとも、いろはの文に今一祈り祈る成らばなどか奇特の無るべき、ポロオン」(虎寛本)

「ちりぬるをわか、ポロオン」(虎寛本)

——(鼻)

(この「いろはの文」という言葉は和泉流でも河村家型付本に「……いろはの文にて祈る成は、なとか茸柴へきせん、ほろおん」と見えている)

「橋の下の菖蒲は、たれがうゑた菖蒲ぞ、おれがうゑた菖蒲じや、ほろむ」(雲形本——柿山伏)

「橋の下の菖蒲は、誰が植たせうぞぞ折れども折られず、刈どもかられず、ポロオン」(虎寛本——彌宜山伏)

「橋の下の菖蒲は、ほろおん」誰が植ゑた菖蒲ぞ、ほろおん

(狂言記——鼻山伏)

「二ノ句一りけんじよ二けんじよ、しやうりけんじよしけんじよ」橋の下のせうぶは、たれがうゑたせうぶぞ、おれがうゑたせうぶしや、しこのぼこの上には、いたゞのたいどの」(和泉古本・抜書——柿山伏)

この橋の下の……の呪文は頼朝時代の鎌倉のはやり唱らしく、「徒然草野槌」に

「一里けんぢやう二けんじやう四けんじやう しこのぼの上にはゑもはもととり 十方鴨、豆なかえたよ 黒虫は源太よ あめ牛めくらが杖つめてとほるところ それはそこへつんのけ橋の下の菖蒲は 折れどもおられずかれどもかられず 伊東殿 土肥殿 土肥がむすめ 梶原源八殿 のけ太郎殿」

と見え「狂言不審紙」には「是は蒲の御曹子の御連枝なれと、よわきにもつよきにも、何の用にも立給はぬを、菖蒲のおれ共おられすと云」と説明している。

このばやり歌は今日も子供の遊び唄として一部が地方に残存し、「草履かくし」として遊ばれているらしい。山

伏の勿体つけた祈りの呪文が、子供の「草履かくし」の遊び唄だと思つと実にゆかしいである。

この「一りけんじよ」の文句は今日では残存しないが、前述の河村家型付本にも、特異な文句が見られるので紹介する。不動明王をずらりと並べ、めでたい文句をつらねている。

「一ノ松へ行テ印ラムスビ、順掛テフシ。一にこんから二せいたか、三にくりがら、しつたいはつたたい、寿命長久富貴円満ほろをんトイノルト……」(型付本——茸) (鈍太郎)

五月の予告

- 五月三日 かすみ会 雑子会
- 五月五日 巽 会
- 能加 茂 岡野 智江 西村 欽也
- 能羽 衣 佐藤 友彦
- 能舟 舟慶 植村 本子 高安 滋郎
- 能文 山賊 井上松次郎 井上礼之助
- 五月十日 掬水会
- 能花 月 深見 真澄 高安 滋郎
- 五月十七日 鳳鳴会 素謡会
- 五月廿三日 一謡会 素謡会
- 五月廿四日 也留舞会(有料)
- 狂宗 論 茂山忠三郎 中沢たゞし
- 狂花 子 野村又三郎 野村万作
- 狂武 悪 野村万之丞 野村万之丞
- 狂宗 須語 井上松次郎 野村万之丞
- 五月卅一日 壺泉会

好評 安田の交通安全貸付信託

お預け額の10倍のはたらき!!

交通戦争に備えた安田信託銀行ならではのサービスです

安全・有利な貸付信託に

交通事故傷害保険をセット

安田信託銀行

名古屋支店 名古屋駅前支店

名古屋市中区栄3丁目 (丸栄西) 電話名古屋 (251) 5171 代表

名古屋市中村区笹島町1丁目 (都ホテル前・錦通り) 電話名古屋 (541) 1317 代表

秘伝や口伝

西村 弘敬

本年三月発行の能楽協会報の第十一号第十一頁に、京都の金剛流豊島弥左エ門氏が「芸談といふこと」と題して一文を載せられてあります。其の趣意は名人大家の芸談集などは誠に貴重なもので吾人も啓発せられる事が多いので、誰しもなるべく多くの人々の自己の自得した事柄や伝承を受けた事柄などを発表せられる様希望する旨を述べられてある。元来此の道の芸は奥深くして且つ大切にする主旨で秘伝口伝として一般に発表する事を極端に嫌ふ傾向であるが、折角の秘伝口伝なども若し其人が死去する様な場合には其まゝ消へて断絶する事になり、誠に惜しい事でありませぬ。殊に秘伝口伝などの中には自己の独善的(ひとりよがり)のものなどがあり、折角の秘伝などが全然他の人に判らずにすむ場合が出来るので、或る程度に「アウトライン」だけでも公開して予備知識を与へて置けばそれ等の事が人に認識せられる事になる筈であります。其一例として私の流儀の土蜘蛛の能に「汝王地に住みながら」の所でシテへ手を指す型がありますが、指すのに「ひとさしゆび」一本でする之れと檀風の能に脇が舟人へ「悔むな男」と指す此の二番だけで之れを呪咀(しゆそ)の指などいふ所謂秘伝とされて居るが、之れなどは自己以外の誰も知らずに全くの自己独善であるので斯様の事を知って居れば其仕方を見てなる程と合点が参る次第であります。以上の論議で或る程度の秘伝口伝は公開する必要もあるかと考へられます。

女犯

先日珍しく「骨皮」が野村又三郎氏他共同社の面々で演ぜられた。この曲には狂言には珍しくかなりきわどい科白がある。

「シテ先聞かせられ。こなたは手まねきをして、いちやを連れて眠蔵へい。だ狂ひを召れたでは御ざらぬか、住持、イヤあれは衣のほころびを縫ふてもらふたシテ、ほころびをぬふて貰ふたものが、ふたり共に鼻の上へしっぽりと汗をかく物で御座るか」(大蔵・虎寛本)

「いつそや門前のいちやが齋の物をもってきたれば、いやト云物ヲむりにめんさうへつれていて、一時も一時も、どばとのうめくようにおしやつたは、それハたくるひてハなひカト云」(和泉・天理本)

新発意が坊主の女犯をすっぱ抜く所だが、この他にも「若市」では若い尼にも「いつそや門前のいちやが齋米を持て来れば、めんさうへつれていて、暫すると赤い顔をして出させられた」(河村家・型付本)

と逆襲される。岐阜県能郷には「鐘引」という狂言が伝わるが、これは商人の妻と間男である坊主の濡れ場を扱ったものである。新発意の方も負けずと、「水汲」では情緒あふれるちわげんかをたっぶり見せつけ「若和布」では女の誘惑に負けて夫婦の契を結んだりする。とかく坊主は油断がならぬ……。(鈍太郎)

六月の予告

Table with 3 columns: Date (e.g., 六月五日), Title (e.g., 熱田神宮奉納能), and Cast (e.g., 吉田 俊彦, 西村 欽也).

昭和四十五年七月十二日 午後二時卅分始 熱田神宮 能楽殿 主催 朝日新聞社 狂言共同社 第十二回 朝日狂言会 犬山伏 右近左近 花盗人 中之舞 釣針 会費 指定席 七〇〇円 普通席 五〇〇円 取扱所 朝日新聞名古屋本社企画部



昭和45年6月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前375/2
井上重兵衛方 電(521) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電 431-7445

狂言人語

うっとおしい梅雨の候となりました
毎年のことながら、朝ふとんに目ざめて
雨音を聞くと、とたんにうんざりし
ます。板屋を叩き、苦屋にそゝいで琵琶
の音に和した雨も、現代では冷たい
コンクリートを濡らし、音もなくアス
ファルトの上を流れます。雨にもの想
うことがなくなりました。青空と肌を
焦がす太陽が待ち遠しい季節です。

六月はまたクアンボク(クワンボク)の月。平和な
日常生活の内に迎えた六月、十年前の
街頭と今日の間には、十年の月日のへ
だたりが大きく感ぜられます。平和な
日々がいつまでも続くよう、一人々々の
意志表示が真に必要な時でしょう。

ところで「狂言会」が続きます。当
地では未だ年に三回ほどしか開けない
「狂言会」ですが、皆様の暖かい御支
援で着実に回を重ねております。先の
又三郎氏「花子」を中心に大曲を配し
た「やるまい会」に続き、朝日狂言会
が別掲の如く開催されます。曲目は変
化に富んだ魅力ある佳曲を取り揃え、
大藏流、善竹忠一郎氏、茂山千五郎氏
和泉流宗家保之氏を初め、共同社全員
が勢揃いしてお贈りする「朝日狂言会

「必ず皆様の御期待に応えられるもの
のと思えます。是非おでかけ下さい。
※紙面の都合上、「狂言解説」は休載
しました。
※七・八月は例年通り休刊します。

六月の催能

六月 五日 熱田神宮奉納能

一部 十一時始 (来聴歓迎)

能田 村 稲川 寿一 西村 欽也
吉田 俊彦

狂 二九十八 佐藤卯三郎 野村又三郎

二部 二時始 (来聴歓迎)

能羽 衣 加藤繪兵衛 高安 滋郎

狂 附 子 井上松次郎 佐藤 友彦
井上礼之助

六月 七日 名古屋賞能(有料)

能 蟬 丸 杉浦 友雪 宝生 閑

能 三 輪 片山博太郎 宝生 弥一

能 望 月 片山慶次郎 宝生 弥一
善竹圭五郎

狂 宗 論 大藏弥太郎 善竹忠一郎
善竹圭五郎

六月十四日 青陽会(有料)

能 鶴 亀 河村 鉦二 高安 勝久
佐藤 秀雄

能 忠 度 梅若 盛義 高安 滋郎
井上礼之助
西村 欽也
大野 弘之
井上松次郎
佐藤 友彦
六月二十一日 観世会(有料)
能 芦 刈 橋岡 久共
井上礼之助
武田多加志
佐藤卯三郎 大野 弘之
片山博太郎
佐藤 友彦
六月二十八日 宝生会(有料)
能 盛 久 宝生 英雄 高安 滋郎
大野 弘之
辰巳 孝 西村 欽也
佐藤卯三郎
井上礼之助

狂 文 蔵 井上松次郎 大野 弘之
六月二十八日 宝生会(有料)
能 盛 久 宝生 英雄 高安 滋郎
大野 弘之
辰巳 孝 西村 欽也
佐藤卯三郎
井上礼之助

狂言浅深

五月号はわたくしのまわがいかから、
十行端折つてまどめてしまい、枝葉の
ない、一見骨皮だけみたいな文章にな
つて、まことに申訳ありませんでした
あれに、映画「アポロンの地獄」(パ
ゾリーニ監督、マンガノほか出演)
や心天(ところてん)にふれて、花を
つけようとおもいました。マンガノ
は美しい。いまでも泣増にたとえたい
美しさで、その口元はかつてみたとき
とおなじように、若い女面のように不
思議、わたくしの目に焼きついて、は
なれないあこがれを再見させた。監督
パゾリーニはこれに雅楽の楽器を使つ
ていたようだ。同じ作者の「メディアア

(名古屋未公開)でも箏曲や、地唄が
応用されている由、小泉文夫氏の随筆
「王女メディアアの音楽」(朝日、五、
八)でおしえられたが、それは若いオ
イディプスの心の大きな変化、流動を
あらわすとき、五、六度もつかわれて
効果をあげていた。これも珍しかつ
た。そして母親イスカリオテに扮する
マンガノの容色はむかしみたユリシ
イズの貞節な妻ベネロペよりもすが
がしかつた、失せぬ花を目前にみた
いえよう。ところてんは、この頃は二
本箸でしかも塗りのはしを用いる。今
年は実にたびたび口にする機会をもつ
た。むかしは一本ばしですすつたもの
だし、母もよくおやつにだしてくれ
たものです。家でするときはあの押し出
すときの音がたまらなくおもしろかつ
た。時が移れば、味は余りかわらぬの
に、食べ方は変わるものであろうか。さ
で、四月から五月にかけては、訳あつ
て、名古屋市内の青葉、若葉のかけを
たづね、熱田さんの舞楽神事で長谷晴
男権宮司演ずる陵王をみせていただき
そのとき笛師の菊田東穂氏に、久方ぶ
りおあいしたが、また牡丹もみるとい
う、東奔西走のかんじであつた。しか
し今年も万国博能はおるか、京都、大
阪、東京のいろいろな演能も拝見でき
ず金春晃夷氏よりお招きうけた奈良の
新能にも行けず、欠礼する仕末。奈良
の知己にあうことも稀な昨今、狂言の
石原昌氏の計報に接して、もうはれが
ましいお能奉行がうつつつけのおだや
かな姿をみる事ができなくなつて、
また一人むかしなつかしい知人を失つ

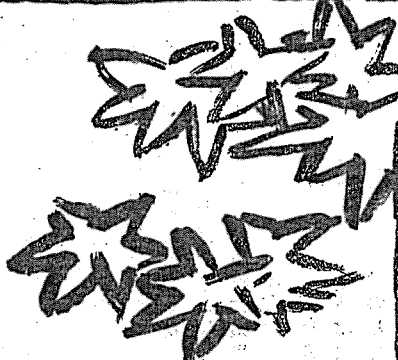
てしまった。ご冥福を祈りたい。次は私事ながら、五月中旬老母他界。そのあと家内も臥つて、六月の名匠鑑賞能の「宗論」(大蔵弥太郎、善竹忠一郎、圭五郎)には行けなかつた。父死去のときは、若いときで寂しさも余りつよくなかつた。それが今度はさみしくてならない。夕暮はことにたまらない、女親のいつくしみとはこれほど深いものであろうか。それが狂言や能では、失つた子をたづねる母親の愛を奏でる佳品隅田川などがあるのに、こどもが親の死を歎き申う曲趣の作品があるのでしようかと家内に問われて、さあといったきりだつた。実は、わたしの家は、代々尾張徳川家に仕えていたが、祖母に当る人は画を好んでかき、となり同志の柳生家の若様に可愛がられた父は、長唄の三味線をよく弾き、父の兄は花の先生(美笑胡流家元、絶ゆ)でわたくし同様酒好き、母は花と茶をたしなむ、父にはお宮さんや、お寺へよくつれていつてもらつたものです。若い頃はいまテレビでみる「オランダおいね」(CBC)のようだつた。母は芝居見物が楽しみであつた。こういう境遇(遺産)が、ルネッサンスを好ませ、文芸批評に志し、狂言や能(邦楽)にすませ、その狂言や能をみなければ何もすることがない素地をつくつてくれたのであろうと、やさしく包容力の大きなわが家のしつけが今更のよになつてかしくならぬ厚かましくも父母から古典芸能の世界にみちびかれた所以をつづりましたが、お許しねがいたい。それで、やるまい会の「宗論」(千之丞、忠三郎)と「武悪」

(万之丞ほか三兄弟)はあえてみせてもらつて、勝手に、今亡き父母にたむけさせてもらいました。それから、近頃、能は死の芸術(梅原猛、能芸論、日本の古典芸能(3)ほか)といわれています。たしかに佳人、武人、文化人を拉し来たつて、かつてのこの世の喜怒哀楽を物語つて、後、あの世のくるしみにたまらず回向を頼む。まさに死者の到来です、地獄の思想表現でしょうが、そのあと、救済が待ち構えています。救われない曲の構成もありますがこの救済があつてこそ、能は生きているとおもいます。能はまた、(永)生の芸能(芸術)ではなかつたでしょう。明暗のうちにあかるきを見出して余りあるとおもうのですが。成仏のこゝとばでいつもほつとして一曲を見おわります。それと、某日、M教授におおいた折、世阿弥の話にふれ、「花」のことばを一体世阿弥はどこからとり上げたのかとたづねられて、返事に窮しました。いままで当り前のこととして使つていたので。数冊の本をみる時間しか割くことができないときとて最近の本で、「能」(日本)の伝統②マツキンノン、中村保雄共著、淡交新社)「能」(日本の古典芸能④、芸能史研究会編)の二冊にべつ見した由をお伝えしました。前者は二二頁に「連歌の世界において、世阿弥を愛した二条良基がくりかえし説いたもので云々」とある。後者は「歌論と能楽論」(田中裕)です。折り返し、M教授から花の論について丁寧な長文をいただく。それを紹介するだけの紙幅がないのは失礼ならまことに残念です。

別稿にゆづらせていただきます。頂門ノ一針、脚下照顧とはまさにこのことでしょう。それにつけても、最近の著書は新視野にたつ本が数冊出版されています。どれも立派な成果で、わたしの知りたいことばかりです。十年前二十年前、それよりも前の頃とは発表内容の仕方が。幽玄と笑いは、かわらなくても、随分とかわつたとおもいます。諸賢の今後の活躍を大いに期待させていただきます。

上半期の演能については一年回顧のなかにゆづらせていただきますが、「奈須ノ語」(井上松次郎)「花子」(野村又三郎)「骨皮」(又、松、弘、礼、卯)と「道成寺」(能楽の友発刊三周年記念能、梅田邦久)と「絃上」(楽入ほか、豊嶋弥左エ門)は挙げておきたい。上半期の狂言共同社の活躍が交りないのは申すまでもありません。催しは、春の院展と光風会と明治、大正昭和名匠展に行く。光風会には若女の唐織姿の画をみつけた。吉村純功氏(三重県)。名匠展松坂屋では、契月、古怪、麦遷、御舟、劉生、大観(順序不同)に小茂田青樹の「どじょう」となつかしくも竹久夢二の「雪の街」をみるという眼幅の榮に与る。ちやうどすばらしい狂言や能にあつたようでした。どの面が能楽師のだれにあてはまるだろうかと思えながら、それも身辺整理に忙殺されてできずじまいになつた。なお、山路曜生作舞リサイタルで「脇僧」(故高浜虚子作詞、山路曜生披露)をみたことも付言したい。

放送は、「頼政」(橋岡久馬)「大原御幸」(鏡之丞)「狂言に生きる」



 新進狂言

 中區丸の内一丁目五ノ二三

 (31) 五七六九

(人生読本、大蔵弥太郎、以上NHKラジオ)、「日本音楽の裏街道」(仏教音楽と語り物、黛敏郎、中京テレビ)「捧しぼり」(万之丞ほか三兄弟)と「首引」(善竹圭五郎)に「熊野」(梅若六郎、NHK)、「黒川能の画」(芸術院賞受賞、森田茂、東海テレビ)。本は「東海、人と土」井上松次郎(朝日、五、一八)、「近代日本の美意識」(国文学六月号、巻頭言、西尾実日本人の美意識—死の美学、梅原猛)、「世界文学の中の日本文学」(解釈と鑑賞五月号、日本の伝統的文学理論と、西洋、上田真、川端康成と雪国、ジエムズ、T、アラキ)、「天皇の世紀」(大仏次郎、挿画、舞臺数回、橋本明治、朝日、九一七回前)、「狂言とかたわ者」(北川忠彦、民俗芸能狂言特集、四〇号)、「巻頭言」(古川久、同上)、「新能」(名タイ、五、二)、「狂言」(日本の古典芸能④、平凡社、未見など。

六月に入つて泰山木の白い花が開きはじめ、百日紅の花芽がのびる。七月の十二回を迎える朝日狂言会に期待し

たい。
檀風 (だんぷう)
西村弘敬
宝生と金剛の二流にだけ有つて外の流儀に無ひ能で、表記の様な曲がある。
上演される事も至極少なく所謂稀曲であつて、当地では大正八年頃小生の先代の追善能の際に仕手方は先代の金剛殿氏脇は小生で勤めた事があるが其後は全然出て居りません。此の曲の筋は元弘の合戦に朝廷方が敗北して壬生大納言日野資朝郷は佐渡の国へ流され御家人本間何某に預けられて居た、其の子梅若丸といふのが今熊野の山伏師の阿闍梨の助けを得て遙々佐渡迄面会に行つて都合よく面会は出来

薪能

第五回
昭和四十五年八月一日(土) 午後五時三十分始
熱田神宮境内
竹腰勝一 高安 滋郎
鈴木久 高安 滋郎
梅田邦久 西村 欽也
佐藤秀雄
井上松次郎 野村又三郎
井上礼之助
他三舞囃子 仕舞

大衆能

第十一回
昭和四十五年九月六日 午後二時始
愛知文化講堂
柴田 西村 欽也
井上礼之助 高安 滋郎
内藤泰二 高安 滋郎
野村又三郎 高安 滋郎
和島富太郎 高安 滋郎
佐藤秀雄
井上松次郎 野村又三郎
井上礼之助 野村又三郎
佐藤秀雄 野村又三郎
佐藤卯三郎
他に舞囃子 仕舞

たけれど折悪しく北条方より敵命が来り目前にて斬られたので本間を目前の敵とし山伏の助力にて其夜中に本間を討取り船着場迄逃げて来た所、拆柄槽ぎ出さんとして居た舟に便船を頼んだが船頭は乗船を許さないで困つて居た、一方追手は追掛けて来るので山伏

は三熊野権現に祈誓をかけ、法力にて東風にて出でんとする舟を西風に変へて舟を戻し、二人が舟に乗りてから再び東風に変へて若狭の港の方へと走らせた即ち風を恣(ほしいまゝ)にしたといふ筋で実際には有り得ない事ではあるが以上の様な筋合である。
そこで「ほしいまゝ」といふ字は、「恣」「縦」「檀」と三通りあるが、「檀」の字は「せん」と読む字で「才」(てへん)に書く筈であるが謡に用ひてある字は「檀」(だん)といふ字で「木」(きへん)に書く、此檀(だん)といふは本来「まゆみ」といふ硬質な木で之れにはせん檀(せんだん)白檀(びやくだん)、黒檀(こくたん)紫檀(しだん)などと香木や家具に用ひられる至極上質な木材で、又檀といふ字は、仏教の方では檀家、檀越、檀那、などという場合に用ひられる字であります。手へんに書くべきものがない間に木へんに間違つて用ひられ読み方迄が交つたものと思へる。

此の曲は初段の辺では春栄に似て又中段の所では盛久と望月に似た所があり後段は調伏曾我に似た所がありシテと子方との問答、ワキの介入など終始悲壯の感に満ちた曲であるが特に子方が活躍を要するので子方の芸達者の人が無ければ上演は六かしいと思ふ。

つであつた「察病指南」を手本として二三種の脈の名とその病状を簡単に誌してあります。東洋医学に残る脈診は、触感によつて分けられ、例えば浮脈は軽くふれたとき、沈脈は充分に押えてふれる脈であり、それも左右の腕骨動脈を同時にふれたり頸動脈や足背動脈も使われます。実験治療二八六号から引用します。それによりますと元禄十二年(一六九九)の観世流の秘曲を集めたものに収載され、すでに全曲はな

脈論の部分のみ記されていて、現在は廃曲です。宋代の名医、劉仲遠にあやかつたのだらうと考えられます。

廿四 仲遠 脈論共云

夫人形精を觀するに、人の長たるは脈もながく、たけ短きは脈も短し。人肥たるは脈も沈なり。疲たる者は其脈浮なり。盛んなる身は脈も大なり。弱きは其脈小なり。浮は風邪含熱の脈、沉は下血滑吐逆。寒も内熱。弦なるは胃、風力すくなく、盗汗多く、手も足も散動しつつか皮毛かれ、盤脈諸痛、洪脈は、これ大熱の基なり。微は是虚肺、沈脈は冷気水腫の脈としれ。緩脈中風並にしようは氣血の不足なり。遲は是腎虚、中寒痔伏は是氣の滞り、物の集る形なり。濡は上熱下冷して弱脈凡虚なりけり。少年逆死、老年則是を順とする。長脈あれば、身熱して起き臥す事も安からず。短は宿食不消也。虚脈は力すくなくて、心ほれつつ胸さばく

仲遠について

四月号の狂言浅深で、仲遠にふれられたので紹介致します。室町時代の末(十六世紀後半)、医学の教科書の一

促しりぞけば生と云。加ふる時は死するなり。結は胸満積、氣有。又痰飲もあるとしれ。代は悪脈、少年は死するといへば、老は生。寧脈出る時は、只骨の間に痛あり。動は崩、中血利なり細は氣血も共に虚し、髓も冷たる脈の躰。是医の道の初学なり。

充分な検査法のなかつた時代の診断のむつかしさが思いやられます。しかしながら現在でも脈診により、血圧、動脈硬化などは推測できますし、脈波計により波型を記録して分析してあります。東洋医学では、診断法として、望聞問切の四法があり、望は視診であり見ただけで病を知るのを神といい、聞は音声を聞いて診断する医師で聖と云う。問は訴えを色々たづねて診断し工と称し、切が脈診で診断し功という。即ち脈診で診断する医師は最低水準と考えていた。脈診の説明は後日にゆづります。(大野弘之)

七、八、九月の予告

七月五日 調友会 午後一時始
能 安達原 観世 寿夫 高安 滋郎
狂 素袍落 井上松次郎 井上礼之助
七月十二日 朝日狂言会 午後二時始
犬山伏 佐藤卯三郎 大野弘之
右近左近 佐藤秀雄 井上礼之助
花盗人 和泉 保之 茂山千五郎
神 鳴 茂山千五郎 善竹忠一郎

釣針 井上礼之助 河上丘造
井上礼之助 井上礼之助 井上礼之助
佐藤友彦 大野弘之 大野弘之
井上松次郎 佐藤友彦 佐藤友彦

七月十九日 正楽会
七月廿三日 学生宝生会 全国大会
七月廿四日 学生宝生会 全国大会
八月一日 薪 能
八月二日 宝生、官実団楽誦会
八月十六日 乱 能
八月廿三日 加藤良久 喜寿記念祝賀会
狂 蝸 牛 井上松次郎 井上礼之助
八月 卅日 名古屋金春会
九月 六日 大衆能 於 文化講堂
九月十三日 観世流楽誦会
九月十五日 橋岡会
能 鷲 橋岡 久春 西村 欽也
能 安達原 橋岡 久馬 森 茂好
狂 不見不聞 井上松次郎 井上礼之助
九月 廿日 婦人師範連合会
九月廿三日 嘉誦会 素誦会
九月廿六日 むぎの会
能 藤 衣斐 正宜 西村 欽也
能 熊 坂 長田 驍 高安 滋郎
文 荷 大野 弘之 井上松次郎
九月廿七日 壺泉会

附祝言

花 乱 能
昭和四十五年八月十六日 正午始
河村総一郎 衣斐 正宜
寛 鉦一 橋岡 久馬
後藤孝一郎 久田 秀雄

舟 弁 慶
鬼頭 季信 有賀 滋子
熊沢惠美子 服部 沙枝

盆 山
林 甲子夫 佐藤 太俊
田鍋惣太郎 辰巳 一雄
井上松次郎 殿島 修二

羽 衣
後見 田鍋惣一郎 地謡 大野弘之
田鍋洋一 井上礼之助
佐藤 秀雄 西村 欽也

蝶 寛 三男 内藤 泰二
柴田初太郎 地謡 田鍋惣一郎
田鍋惣一郎 竹内 栄逸
田鍋惣一郎 二井 六郎

雷 戸田 秀雄 西村 欽也

葵 助川 竜夫 福井啓次郎
上 鬼頭 八郎 長由 滋郎
山口 義郎 高安 滋郎
梓ノ出 吉田 定男 加藤 文太郎
野崎 太郎

後見 後藤孝一郎 地謡 河村総一郎
鬼頭 季信 寛 鉦一 池田 三男



狂言人語

夏の終りを告げるつく／＼法師の鳴き声がいつの間にか聞かれなくなつたと思うと、夕方にはこれに代って涼しい虫の音が心をなぐさめてくれる候となりました。まだ／＼残暑は厳しいものがありますが、さわやかな秋風と高い空といわし雲と——残暑を拭い去ってくれるのも今しばしです。

数々の話題を生み、世界の伝統と文化を集め、「人類の進歩と調和」を私達に暗示してくれた万国博も、いよいよこの十三日で幕を閉じることになりました。華やかな思い出に色どられたお祭り広場、輝かしいシンボル太陽の塔、そして話題をさらったアメリカ、ソ連等の展示館——やがて秋だけなわとなる頃には、或いはとり壊され、或は残されるものもひっそりと片隅に身を沈め、往時の面影をわづかにとどめてくれるでしょう。まさか今の世に夏草の生い繁ることもありませんが、
「世界の祭の跡」を感じる日も遠いことではありません。祭のあとの充実感とわびしさ——華やかさが強ければ強いほど、残るわびしさは、また強烈なものです。特にこの種のわびし

昭和45年9月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町6/2
井上重兵衛方 電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電 481-7445

さは、日本人の心をよく捉えるものです。日本文化の伝統の大きな柱の一つはこゝにあると云えるのではないでしょう。私達の愛する能の世界もすべてこの心から出発しているといつてよいでしょう。

さて当年は和泉流狂言界の長老三宅藤九郎氏が目出たく古稀を迎えられました。これを祝して今秋十月十日には祝賀狂言会が東京で予定されております。

三宅藤九郎
古稀祝賀狂言会
十月十日(祝) 正午始
水道橋 能楽堂
翁 喜多 実 三宅藤九郎
三番叟・子宝 三宅 右近
千歳 三宅 保之
犀ノ神之風流 野村 万蔵
孫 野村 万蔵
月見座頭 茂山 千作
唐人相撲 大蔵弥太郎
三宅藤九郎
野村万之丞
和泉 保之

兄野村万蔵氏と並んで当代狂言界に並ぶものなき至宝——どうか今後もこれまで以上に若く元気な舞台姿を見

せていただけますよう。私達も当地から紙面を借りて心からのお祝いを述べさせていただきます。
本当におめでとうございます。

九月の催能

- 九月 六日 大衆能 於 文化講堂
- 九月十三日 観世流素謡会
- 九月十五日 橋岡会
- 能 驚 橋岡 久春 西村 欽也
- 同 佐藤卯三郎
- 能 安達原 橋岡 久馬 森 茂好
- 同 佐藤 秀雄
- 能 不見不聞 井上松次郎 佐藤卯三郎 佐藤 友彦
- 九月 廿日 婦人師範連合会
- 九月廿三日 素謡会 素謡会
- 九月廿六日 むぎの会
- 能 藤 衣斐 正宜 西村 欽也
- 同 井上礼之助
- 能 熊 坂 長田 曉 高安 滋郎
- 同 佐藤 秀雄
- 文 荷 大野 弘之 井上松次郎 佐藤 友彦
- 九月廿七日 壺泉会
- 能 熊 野
- 狂 盗 山 佐藤 友彦 井上松次郎

狂言解説

仁王||博愛に負けて一文無しになった男、何某の才覚で仁王に化け、参詣

の供物をかすめとろうと企てます。何某の協力でうまく行ったか見えませんが、やがて大草蛙をぶらさげたちんばの男が登場します。ちんばは仁王の身体を自分の不自由な身体にうつさんと仁王の身体中を撫でまわし始めました。
不見不聞||つんぼの太郎冠者だけでは心許ないと座頭の菊市も頼んで、二人に留守居をさせて、主は外出しました。不具者同志、聞く役を菊市、見る役を太郎冠者と不意の場合の手はずをとり決め留守居をする内、退屈紛れに座頭が冠者からかったことから、さあ、不具者同志のばかし合いが始まります。
文荷||主から文の使を仰せつかった二人の冠者、余りの重荷に二人でかついだものの、なんとしても重くて持てません。不審に思つて文をひらいて見ると、恋の重荷は重いが道理、狭い紙面の中に……
盆山||流行の盆山を手に入れんと知人の宅へ盗みに入った男、運悪く家主に見付けられ、あわて、植え込みの陰にぐれしました。家主も見れば知人のこと、事をあらだてるよりは適当になぶって掃そうと考え、犬じや、猿じやと声かけ、その度毎に男は吠えたりないたり、遂には鯛じやと云われ

狂言浅深

野村広二

八月中旬、雷雨の朝を迎え、終日雨が降つたり止んだりした。朝晩涼しくなつたのもこの頃であるが、遠去つていた自然が近か付いたようであつた、この夏は今年から夏におこなわれる乱能にも行かず、新能にも参会しなかつたが、共に盛会だつた由。主催者の努力も報われたといえよう。七月は、中句に蟬の声をしきりにきき、とんぼが飛ぶのを庭でみる。蟬はそれから毎日あの雷鳴が一日中きこていた日でも朝から夜まで鳴っていた。高くなつた桜の葉を通して月もぼんやりみえた。二度目杏竹桃の紅い花が咲く時分でもあつた、八月になつて、庭でがまに出あう。「やあ、今年もあつたね。」と呼びかけたが蛙の大きな頭とまちがえそうになつた。蟬の声から蛙鳴蟬噪という成語をおもいだしたが、能楽堂で狂言のとき、またワキが登場して、能一番のふんい気をつくる大事なときにかかれるざわめきとは大いにちがつていた。文字通りこの夏は閉ざされた世界であつた。三月越しの室内の病臥で老夫婦二人が細々とそれでも明るさを失わず、暑さにたえてきたが、一切の家事をするわたくしには、典座の役もまた一大事。惣菜一つ作つても室内の味、母の味には程遠い。それに夏の暴飲暴食、二日酔、勝手な夜深しは許されぬ。その一日一日が狂言や能の平常の稽古に通ずるように思われた。そして時節がたつにつれて、献立もか

わり、ふつとめづらしい小案知恵もでる。これがあの「花」というものであらうとおもつたりした。それで、鎌倉に隠棲し給うY・Y氏(文化財保護委・第四専門調査会委員)から三越落語会(第二〇九回)の番付を添えていただき、M教授とことしの柳川鍋をたべ「花」の後日談をかわし、「興がる」のご発表(名大國語国文学二六号、興がる瘦法師)をいただいたのと、谷川徹三先生の骨とう談(週刊新潮、八八号)をよんだことが特記位。この夏も金剛さんの能面や装束の展覧には行けなかつた。画は故岡田三郎助氏の、「松林」と、鏡板にうつしても似合う「松」(平川敏夫)をみる(丸栄)。「花房英樹展(オリエンタル中村)」も。放送は「班女」(浅見重弘)「山姥」(井上嘉久)「井筒」(喜多長世、三つとも独吟)をきき、万博「善知鳥」(観世寿夫)、新作狂言「ぼうふり」(三宅藤九郎作、いづれもNHK)などをみる。本は「かぶき袋」(郡司正勝、日本喜劇の伝統ほか、青蛙書房)など。

九月は大衆能(第十一回)の盛会を期待したい。

十月の予告

十月 四日 九草会

能 葛城

間 佐藤卯三郎

狂 芥川

大野 弘之
佐藤 友彦

十月 十日 中部金剛会例会

能 千手

能 是我意

狂 水汲

十月 十一日 淡交会

能 東岸居士

間 橋岡 久共

能 班女

間 佐藤 秀雄

鬼頭 千枝

井上松次郎

大野 弘之

井上礼之助

佐藤卯三郎

内藤鑑道追善舞雲会

能 海人

村瀬 郁子

吉田 俊彦

風岡 勇二

佐藤 友彦

西村 欽也

能 千手

須賀 千代明

須賀 千代子

高安 滋郎

内藤 泰二

森 茂好

井上松次郎

佐藤 秀雄

井上礼之助

佐藤卯三郎

能 魚説法

名匠鑑賞会

能 遊行柳

- 能 丸 大江又三郎 福王 輝幸
能 橋岡 久馬 福王 輝幸
能 佐藤 友彦 福王 輝幸
能 梅若 六郎 西村 弘敬
能 佐藤卯三郎
能 梅若 景英 福王 輝幸
能 佐藤 秀雄
能 井上松次郎 井上礼之助

好評 安田の交通安全貸付信託

お預け額の10倍のはたらき!!

交通戦争に備えた安田信託銀行ならではのサービスです

安全・有利な貸付信託に

交通事故傷害保険をセット

安田信託銀行

名古屋支店

名古屋市中区栄3丁目

(丸栄西)

電話名古屋 (251) 5171 代表

名古屋駅前支店

名古屋市中村区笹島町1丁目

(都ホテル前・錦通り)

電話名古屋 (541) 1317 代表



昭和45年10月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町5/2
 井上重兵衛方 電(321) 1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電(481) 7445

狂言人語

いよいよ秋たけなわとなつてまいりました。ひと頃秋と云へば「さんま」の季節といえたのですが、今やさんまは高級魚。そして青い空もこの都会ではなか／＼拝めなくなり、空に海に公害問題がやかましく叫ばれているとです。

それでも秋です。芸術の世界はけんらん豪華な装いで私達の目を楽しませてくれます。そして恒例の秋の「和泉会」が別掲の如く開催されます。今回は目出度く当年古稀を迎えられた三宅藤九郎師をお迎えし、野村万之丞氏との「木六駄」を中心に、宗家保之氏の「楽阿弥」他で豪華に繰り上げられます。どうか御鑑賞下さい。

十月の予告

- 十月、四日、九、嵐 会
- 能 葛 城 水野あや子 高安 滋郎
- 能 藤 卯 三郎
- 能 芥 川 大野 弘之
- 能 藤 友彦
- 十月、十日、中部金剛会例會
- 能 千 手 今井幾三郎 高安 滋郎

- 能 是我意 金剛 巖 西村 欽也
- 能 水 汲 佐藤卯三郎 佐藤 友彦
- 十月十一日 淡 交 会
- 能 東 岸 居士 橋岡 久共 高安 滋郎
- 能 班 女 鬼頭 千枝 西村 欽也
- 能 井上松次郎 大野 弘之
- 能 井上礼之助 佐藤卯三郎
- 十月十八日 内藤鐵造追善興雲會
- 能 海 人 村瀬 郁子
- 能 吉田 俊彦 西村 欽也
- 能 風岡 勇二
- 能 千 手 須賀 千代子 高安 滋郎
- 能 須賀 千代子
- 能 道成寺 内藤 泰二 森 茂好
- 能 井上松次郎 佐藤 秀雄
- 能 井上礼之助 佐藤卯三郎
- 能 魚 説法 名匠鑑賞能
- 能 大江又三郎 福王 輝幸
- 能 橋岡 久馬 福王 輝幸
- 能 佐藤 友彦
- 能 蟬 丸 大井 三郎
- 能 遊 行 柳 梅若 六郎 西村 弘敬
- 能 佐藤卯三郎
- 能 望 月 梅若 景美 福王 輝幸
- 能 佐藤 秀雄
- 能 栗 焼 井上松次郎 井上礼之助

狂言解説

芥川||西の宮へ参る途中道連れになつたびつことしようが、手の不具者同志互に自分の不具をひたかくし、相手を笑ひものにした拳句、おきまりの相撲となりませう。

水汲||お茶の水を汲みに門前のいぢや。(若い女性)を頼んだ新発意、あとからこっそり泉へ出かけると女は小謡で水を汲んでいます。若い女と新発意の楽しい小謡のかけ合いが始まります。いろは||そろ／＼自分の小供に文字を覚えさせんものど、いろは四十七文字を口写しに親の教育が始まりますが忠実に真似る子供は結局親を怒らせる破目となりませう……。

魚説法||お経の文句も満足にしろな新発意が、今日は住持に代って法事にやってきました。さてありがたい説法が始まりますが、聞けば魚の名尽しのなまぐさ説法——とう／＼壇那は腹を立ててしまいます。

栗焼||丹波の叔父から貰った大事の栗を焼く様付けられた冠者。台所で栗を焼くのですが、その栗のうまそうなこと、つい一つと思つて手をつけたのが最後、口がはなされず皆食べてしまいます。さてその申訳は……。

狂言浅深

野村 広 二
 九月十三日 夜来の雨があがつて、にはかに秋らしくなる。その翌日は、

まったく秋の目射しに旅情がしきりにかきたてられる。奈良や京都・洛中洛外の話を臥せる家内とかわす。日ざしも家のなかにあかるく入りこみ、鐘たたきの声もはげしい。今年の月は無月の名月に近かった。実は八月末から空のきれいな夜はまれで、したがって九月はじめの三日月はみられなかった。芙蓉の花がひらくのもその頃。横庭の無花果の実を見舞にきてくれた叔母がもぎとる。下の方のは叔母でずっと上の方にあるのは、わたくしがとる。白い方で在所にあった木の五代目にあたるものから、今年はじめて実がなる。紅い実は大きく味が白にくらべて甘さがうすい。白は小粒でも甘味は強くてまた乳児に頼ずりするときのように乳くさい。ちようど「花鏡」に述べられる「浅深之事」の事書のように、なかなか味わいたつぷりとおもつた、さて、今年十一回目を迎へた大衆能はなかなか盛会で、舞台は、各役者の力演でみごたえがあったことをお伝えしたい。もちろん狂言「仁王」も保之家元に名古屋の総勢で演じたが、なかなかおもしろかった。ただ見物席が少し暗すぎ、舞台の正先にはやはり影がさし、まるで、ギリシャの哲学者のことばではないが、暗闇に住む人間たちが、明るいアイデアの世界を望見するような感じがした。八月下旬、M教授をおたづねする。談たまたま病氣のことから、中世貴族と白内障・糖尿、道長のこと、源氏物語の構成と制作年代の話にうつり、再転して花伝書・花鏡のことをうかがう。その夜は欲をつ

くして辞し去る。また某日、G大の集中講義に半日出席。縁の丘に包まれた風景は、アリストテレスの逍遙学派を想像するような佳き環境、修学院離宮（林丘寺）のあたりから京都の町をみるような晴々したかんじがする。「伝統芸能と放送」のテーマをもらってしたが、能芸論を例に話して、一つ言い残したことをここに書き添えたい。それは日本の芸術（文化）のカタに縄文と弥生の二つの原型があり、それが極度に洗練されて、いりまじっているものの一つが能であること。全体は鎌倉のY・Y氏M教授と谷川徹三先生の諸説を祖述したものです。なお週刊新潮九・一四号の表紙画（谷口六郎）の鐘楼に蟬に二人のこどもがすぐく秋を感じさせています。放送は、「融」（喜多実）をみ「三井寺」（観世寿夫）「富士太鼓」（松本謙三）をきく。また教養特集「鈴木春信」（春信の女と能面ほか、いづれもNHK）もみる。本は「続世阿弥新講」（香西精、わんや書房）ほか。

十月は内藤泰二氏の「道成寺」に期待したい。

「文荷」余聞

狂言「文荷」は謡曲「恋重荷」のパロディであるが、同時に男色風刺の狂言としても有名である。

文の相手は「せんみつ」という若衆。現行大蔵山本東本乃び狂言記には「左近三郎」となっており、この名の場合には狂言では一般的な男の呼名で使われ

るがやはり中味は恋文である。さらに古く「天正本」までさかのぼると「花子」が相手となっており、或いは初期に於ては男色を扱ったものではなかったかもしれない。

男色の風習が盛んになったのは戦国時代で陣中に女が居なかつたため盛んに行われたらしく、『武江年表』にも「男色を無体し申掛若衆狂言することを禁ず」とあり、江戸初期頃までは士民の若衆狂による騒動が絶えなかつたようである。こうした風潮を反映して改めて男色風刺の狂言に手直しされたものであろう。

江戸時代には男色を業とする若衆屋蔭間茶屋なるものが一時はかなり数えられたという。客は主に僧侶、士民が相手であったが、次第に衰え、やがて天保年間には禁止令にあつたこととなつた。京都では加茂川東の宮川町という遊女町の一角に若衆屋があつたという二人の冠者の謡う『加茂の河原を通るとて文を落いたよの（大蔵流）』の小謡も現実的な響きをもつて受けとめられたかもしれない。（和泉流では志賀の浦を通るととなり閑吟集『こが』の語感に近くなる）

狂言でこの他直接男色を取り上げたものは見当らないようだが、稚児をめぐって老若が争う「老武者」や、少人に名を書いてもらう「名取川」などがその匂いを感じさせるものである。

なお狂言小謡の中には明るいエロチシズムを感じさせるものが少くない。いと若衆との小鼓は、しめつゆゆるめつの調べつ、音（寝）いらぬ先に、鳴るかならぬか、チンタッポポポポ、いや、なるか鳴らぬか。

（小鼓・和泉流「小舞謡」より）
（鈍太郎）

十一月の予告

- 十二月一日 青陽会 (有料)
- 能 部 野 柴田 牧武 高安 滋郎
 - 能 松 風 久田 秀雄 西村 欽也
 - 能 安達原 上田 照也 高安 滋郎
 - 能 伯母ヶ酒 井上松次郎 大野 弘之
 - 十一月八日 竹韻会
 - 十一月十四日 和泉会
 - 十一月十五日 観世会
 - 能 実 盛 大西 信久 谷田宗二朗
 - 能 楊貴妃 梅若万三郎 西村 欽也
 - 能 阿 漕 山本 博之 谷田宗二朗
 - 能 鬼 瓦 和泉 保之 大野 弘之
 - 十一月廿三日 観衛会 唯子会
 - 十一月廿九日 風韻会
 - 能 菊慈童 奥田 薫 高安 勝久
 - 能 弱法師 水野 雅子 西村 欽也
 - 能 舟弁慶 殿島満里子 高安 滋郎
 - 能 井上松次郎
 - 能 杭か人か 佐藤卯三郎 井上礼之助

時 昭和四十五年十一月十四日(土) 午後三時三十分始

所 熱田神宮能楽殿

主催 名古屋和泉会 狂言共同社

名古屋市民芸術祭参加 第十回 和泉会

船渡智 井上松次郎 女 佐藤 秀雄

安宅 大蔵 吉田 定男 小後 田鍋 惣一郎 藤田 六郎 兵衛

楽阿弥 和泉保之 所 野村万之丞 野村 三郎 野村 友彦

木六駄 太郎冠者 野村又三郎 三宅 藤九郎 井上松次郎

茸 山伏 佐藤卯三郎 井上礼之助 井上松次郎

会費 指定席八〇〇円 階上席六〇〇円 普通席三〇〇円

入場券取扱所 市内各プレイガイド 但十月十日発売

市内昭和区駒方町三ノ三 法音寺内

河村 丘造方 (八三二) 七三三五

市内守山区小幡 翠松園

佐藤卯三郎方 (七九二) 三〇二八

市内北区豆園町二ノ五三

佐藤 秀雄方 (九一一) 八七八四

県下愛知郡豊明町桜ヶ丘 井上礼之助方 (〇五六二) 九七一一七八七

市内中区裏門前町五ノ二 (事務所) 井上松次郎方 (三三二) 一四三〇



狂言人語

めっきり冷えこむようになりました。あわててストーブの手入れをしたり、冬仕度の忙しい今日此頃です。でもこの冷えこみが自然の華やかな色どりを日増しに深めてくれるもの、茶枯れて地面に命を散らす前の一瞬の生命を燃え上らせる自然は、そのはかなさゆえに一層深く私達の心を捉えるものがあります。

☆ 恒例の「和泉会」、見ものは何と云っても藤九郎氏の「木六駄」であろう。雪の山道を十二頭の牛を追って寒さにこぶえながらの道中、茶屋で酒が入ったの「鶉舞」、一転して酒興にのって一気になを追っての下り道。かつて第二回「和泉会」での万蔵氏の熱演が今も思い出される。後ジテの出る牛を追ってのかけ声の第一声がピンと見所にはりつめた時、思はずその厳しさに身を正したほどであった。当年まさに古稀を迎え、最も円熟した境地にある藤九郎氏の芸でみられることはうれい。大いに御期待いただきたい。
* 藤九郎氏の「古稀祝賀狂言会」が去る十月十日東京で催された。珍しい風流や、大曲「唐人相撲」の上演を含

昭和45年11月1日発行
発行所
名古屋市中区奥門前町6/2
井上重兵衛方 電(321)1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(481)7445

めて大成功の内に終了した。テレビ録画等も行われているので、当地でもやがて近い内に目にする事が出来るだろう。あらためて狂言界全体の喜びとして祝いたい。

* 当地宝生流の内藤泰二氏、去る十月十八日「内藤鯉造追善舞臺会」にて大曲「道成寺」を抜き手向けとされた。当日は満員の盛況、宝生宗家をはじめ同流総力に支えられての同氏の熱演に見所も充分にこの大曲をたんのう、惜しみない拍手がおくられた。あらためてお祝いを述べたい。

* これも例年恒例となつた歳末助け合い「義捐能」が十二月廿日、別掲の番組を揃えて催される。御趣旨をおくみとりの上、是非とも御鑑賞いただきますようお願いいたします。

十一月の催能

十一月一日 青陽会 (有料)

能 部 野 柴田 牧武 高安 滋郎

能 松 風 久田 秀雄 西村 欽也

能 安達原 上田 照也 高安 滋郎

能 伯母ヶ酒 井上松次郎 大野 弘之

十一月八日 竹韻会
十一月十四日 和泉会
十一月十五日 観世会

能 突 盛 大西 信久 谷田宗二朗

能 楊貴妃 梅若万三郎 西村 欽也

能 阿 漕 山本 博之 谷田宗二朗

狂 鬼 瓦 和泉 保之 大野 弘之

十一月廿三日 観衡会 囃子会

十一月廿九日 風韻会

能 菊慈童 奥田 薫 高安 勝久

能 弱法師 水野 雅子 西村 欽也

能 舟弁慶 殿島満里子 高安 滋郎

能 杭か人か 井上松次郎 井上礼之助

狂言解説

伯母ヶ酒||酒屋の伯母を持った男。何とかして酒を吞ませてもらおうとするのですが、伯母はどうしても首をたてにふりません。そこで男は謀事をめぐらします……。

鬼瓦||はるか遠国の大名、永の在京で訴訟ごとくく叶い、めでたく帰国を前にして因幡堂へお礼参りに出かけたのですが、ふと見上げた屋根の鬼瓦に大名は何を思い出したか泣き出しました……。

杭か人か||憶病者の太郎冠者に留守居を云付けて主は外出しました。日も暮れた屋敷内を、こわく見廻る屋敷内でふと太郎冠者の目に写った黒い影杭の様でもあり人の様でもあり、声を

狂言浅深

十月二十五日の名匠鑑賞熊えでかける。ひるから雨の降る日になつたが「蟬丸」(橋岡久馬・大江又三郎)と「遊行柳・青柳之舞」(梅若六郎)に狂言「栗焼」(松・礼)をみてかえる。家に戻つてもなぜか落ち付かず、疲れているのに、何かに酔つたようで快い。「栗焼」はなんでもないようひきしまつてしぶく、上々の出来。家で食べた栗よりもまいと家内と笑い合う。森川勘一郎翁にお目にかかる。蟬丸の運歩について先代万三郎のことは書きかしていただく。

一日、百舌が庭にきて鳴きます。この頃いなくなるはづのとかがも日向ぼつこをしてい。五日ごろ早咲きの山茶花がひらく。庭のすみで泰山木の落葉や反古をもやすと、煙が風のないまま真直ぐ立ちのぼる。明る日射しが氣持がよい。菊はまだ固い。木の葉も緑が蔭影をまして明暗に富み、何ともいえない詩情を投げかけてくる。春の柔らかなさ、夏のざらざらと油照りするざくろやさんごじゆから、秋の影のこい山茶花など、いつもみなれてはいるはづなのに、今年妙にそれがわが心をひきつける。花伝書や花鏡の時分の花をおもわせる。あと一と月もして冬を迎えれば、冷え冷えとしてくる。この冷えのかんじは、能でいえば、恐らく「冷え」の境地であろう。十日は「是我意・白頭」(金剛嶽)をみる。昨年

かけるとぐくいと返事がありました……。

の大蔵記念狂言会のとときとオモテガガわっていただけれど、ヤハリ、後シテが舞台から橋掛え、その幕際のカタチは絶品、また戻つてワキの腰かける車に立寄るまでの緊迫感はずばらしく、大層おもしろかつた。金剛夫妻から久々京都のたよりをうけたまわる。金木犀が部屋までかおつてきていた。狂言は「水汲」(卯・友)。友彦の女のカタチがなかなかよく、小歌もよい。上達といえよう。十八日の「道成寺」(内藤泰二)はみられず、残念だつた。

このあとM教授をお訪ねする。「こころあさきひと」(源氏物語)、伝説論、日本文学と虚構性、花実論、そして、変曲笛物狂のことなどのお話をきく。雨がしづかに降る日であつた。

放送は「卒都婆小町」(桜間道雄)「葵上」(梅若猶義)「棒しばり」(万之丞ほか三兄弟、後・万蔵)「止動方角」(千作・千五郎・千之丞・正義)をみ、「富士太鼓」(松本謙三)「遊行柳」(坂井音次郎)「望月」(豊嶋弥左エ門、いづれもNHK)をきく。本は「中京芸能風土記」(関山和夫、青蛙房)「能・狂言」(四号、竹尾邦太郎、奈良水谷神社能と中日五流能奇贈)ほか。

十一月は第十回を迎える名古屋和泉会と「実盛」(大西信久)に期待したい。

婆羅門僧正

西村 弘 敬

て居りました処、此頃今昔物語集を見て漸くに判明しかけた。之れは和歌の徳をたへた方便に用ひられてある様で、巻絹の謡の中にある都より巻絹を届けに来た使者が、音無の天神の社で一首の歌を詠じた

音無にかつ咲をむる梅の花
句はざりせば誰か知るべき
と読んだのが、神慮に叶ひ納受せられて禁めの縄を免された、そしてよろずの悪念を遠ざかるのは和歌の徳であると述べられ、前述の両高僧の事に及んで居る。そこで今昔物語の第十一巻に此両高僧の事が出て居る。聖武天皇が東大寺大仏殿を御建立なされし時開眼供養の講師に行基菩薩を用ひんとせられたが、行基は我其任に非ずとて辞退し近く天竺より高僧が来るにより、夫に御任命あれと奏上し百人の僧を引具して難波の津へ出迎へに行き、婆羅門が船より下り来ると恰も旧知の如くに手を取り合い、行基より一首の歌を示した。

靈山の釈迦の御前に契りてし
真如朽ちせず相見つるかな
そこで婆羅門が
迦毗羅衛に共に契りし甲斐ありて
文珠の御顔を相見つるかな
と返歌した之れが和歌の徳である謡つてある。因に聖武天皇は此婆羅門に大仏開眼の講師を命ぜられ、供養滞り無く終了してより大安寺に住して婆羅門僧正として月日を送つたとある。

十二月の予告

- 十二月 六日 邦誦会(無料)
- 能 舟弁慶 加藤井知子
- 能 原 正義 高安 滋郎
- 十二月十二日 宝生会(有料)

能 実盛	野口 緑久	高安 滋郎
能 龍太鼓	井上礼之助	西村 欽也
能 福の神	佐藤 秀雅	西村 欽也
能 十二月十五日	佐藤 卯三郎	大野 友彦
能 舟弁慶	学生鑑賞能	弘之
能 十二月廿日	本田 光洋	高安 滋郎
能 一月廿日	井上松次郎	高安 滋郎
能 一月廿五日	殿島 修二	西村 欽也
能 一月廿七日	殿島 修二	西村 欽也
能 一月廿九日	殿島 修二	西村 欽也
能 一月三十日	殿島 修二	西村 欽也
能 一月三十一日	殿島 修二	西村 欽也
能 一月一日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月二日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月三日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月四日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月五日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月六日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月七日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月八日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月九日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月十日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月十一日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月十二日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月十三日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月十四日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月十五日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月十六日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月十七日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月十八日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月十九日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月二十日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月二十一日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月二十二日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月二十三日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月二十四日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月二十五日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月二十六日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月二十七日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月二十八日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月二十九日	梅若追善能	高安 滋郎
能 一月三十日	梅若追善能	高安 滋郎

何と云つても
ますはん
お茶は半半

創業天保十二年
石古屋ビル地下街店

◆大名古屋ビル地下街店◆栄(さかえ)地下街店◆サカエチカ店◆松坂屋(名店街)売店